

阿賀野市立吉田東伍記念博物館 研究概報1 (二〇一一年五月)

【資料紹介】

吉田東伍 著
『貞観十一年 陸奥府城の震動洪溢』
じようがん むつ ふじよう しんどう こういつ

「歴史地理」第八卷第十二号(明治三十九年十二月一日 発行) 所収

阿賀野市立吉田東伍記念博物館

このたびの震災で被災された皆様に、謹んでお見舞いを申し上げます。

被災地の皆様には、一刻も早い復興を切にお祈りいたします。

【略解題】

わが国で初めて「貞観地震」「貞観津波」を歴史地理学的に解析した

じょうがん

むつ ふじょう しんどう こういつ

吉田東伍の研究論文『貞観十一年 陸奥府城の震動洪溢』について

渡辺 史生*

はじめに

二〇一一年（平成二十三年）三月十一日に発生した東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）は、八六九年（貞観十一年）五月二十六日に陸奥国東方の海底を震源として発生した巨大地震Ⅱ「貞観地震」（「貞観津波」との類似性が指摘されています（注1）。

貞観地震と津波については、平安時代、天皇の勅命によって編さんされた歴史書『日本三代実録』に次のような記載があり、その烈しい惨状を伝えています。

「廿六日癸未 陸奥國地大震動 流光如晝隱映 頃之 人民叫呼 伏不能起 或屋仆壓死 或地裂埋殮 馬牛駭奔 或相昇踏 城Ⅱ（土へんに郭）倉庫 門櫓墻壁 頽落顛覆 不知其數 海口哮吼 聲似雷霆 驚濤涌潮 沂Ⅱ（さんずいに回）漲長 忽至城下 去海數百里 浩々不弁其涯Ⅱ（さんずいに矣）原野道路 惣為滄溟 乘船不遑 登山難及 溺死者千許 資産苗稼 殆無子遺焉」（注2）

（以下意訳）

「二十六日 陸奥国で大地震。流光が昼のようにひかった。その時、人びとは悲鳴を上げ、伏したまま立つことができない

かった。ある者は家が倒れて圧死し、ある者は地割れにのまれて埋まった。馬や牛が驚いて走りまわり、互いに踏み合うありさまだ。城郭、倉、門、囲いの壁が崩れ落ち、ひっくりかえった。その数は数え切れない。海口が吠え叫び、雷のような音がして津波が押し寄せ、たちまち城下にまで達した。海から遠く離れていたが、言い表せないほど広大な土地が水に浸った。野原も道路もすべて海原となった。舟にも乗れず、山に登って逃げることもできず、溺れ死んだ者千ばかり、資産や農作物は、殆どのこること無し」

古文書や伝承の存在によって、以前から知られていた貞観十一年の地震と津波ですが、意外にも専門的な研究が本格化するようになったのは一九九〇年代以降のことです（注3）。

東北地方太平洋沿岸の平野部ではじまった東北大学や産業総合研究所等による古地震と津波の堆積物に関する分布調査では、多くの調査地点から貞観津波の堆積物が検出され、範囲や規模等の研究が一気に進みました。発掘やボーリング調査の結果、現在の宮城県石巻市、仙台平野、福島県中部と広範囲にわたって貞観津波の襲来が確認され、古文書の記述や伝承が裏付けられました（注4）。

調査関係者はこれらの成果をもとに、近い将来に地震・大津波の再来の可能性があるを見て、各方面に対して注意喚起をいたしましたところでした。ところが、その警鐘への対策が施されないうまま、

三・一一東日本大震災の発生となつてしまったのです（注5）。
「千年に一度」と称される大難を眼にした今、「歴史の教訓に学ぶこと」の意義が鋭く問われています。

史学史上記憶されるべき著述

歴史地理学者吉田東伍（一八六四—一九一八）は過去の自然災害を検証し、その成果を今日の減災、将来の防災に役立てる、という極めて現代的な視座をもって研究に取り組んでいました。

その吉田の数ある災害史関連の著作の中から、一九〇六年（明治三十九年）十二月に日本歴史地理学会の雑誌『歴史地理』に発表された「貞観地震」「貞観津波」に関する論考『貞観十一年陸奥府城の震動洪溢』を全文紹介します。

吉田はこの当時『大日本地名辞書』（初版全十一冊、完成一九〇七年十月）の編さんの終盤にかかる頃で、多忙な日々を送っていました。吉田自身が記しているようにこの論文は『大日本地名辞書』の陸前宮城郡、その他の関係項目中へ「貞観地震」に関する文章を挿入しようと準備していたものの、これをすっかり失念し、その手抜きを悔い「手遅れでも、之を雑誌に寄稿しておいたならば、多少補足の用になるかと思ひ返し」という動機でまとめられたもので、著者の真摯な研究姿勢がうかがえます。

今日「貞観地震」「貞観津波」の史的研究は広範・学際的にすすめられ、精緻なものになっています。発表からすでに一世紀以上経過した吉田東伍の論文は時代性という限界を持つてはいま

すが、今なお酌むべき着眼点が見られ、示唆に富む有用な論考です。また「貞観地震」「貞観津波」を歴史地理学的見地から解析したもつとも早い論考として、史学史上記憶されるべき著述です(注6)。

「多賀城下である」と特定

貞観津波は今でこそ「貞観の多賀城津波」の異称でも知られていますが、『三代実録』中の「忽至城下(たちまち城下にいたる)」と記された城下とは陸奥国府の多賀城下のことであり、論証によつて津波がそこまで押し寄せたと明確に特定したのはおそらくこの論文が最初でしょう。

『三代実録』の記述では「忽至城下」とのみあり、何郡の何城という具体的記述がありません。つまりこれだけではどの城下なのか漠然としています。吉田は「何郡何城と書せずして、唯、国といひ城といふは、其国府府城のことである」としながらも、当時陸奥にあつた多賀城以外の城郭にも注意を向け、それらの位置や土地の起伏、水系等を検討した上でこれらの候補を排斥し、「此事変は主として宮城郡の府城を破壊したるもの、と確認してよろしい」と断じています(注7)。

『末の松山浪こさじとは』を解明

次に吉田は百人一首の「契りきなかたみに袖をしぼりつゝ末の松山浪こさじとは」(後拾遺集 恋四 七七〇) 清原元輔) の下

の句「末の松山浪こさじとは」に着目します。この歌の本歌である「君をおきてあだし心をわがもたばすゑの松山浪もこさなむ」(古今集東歌 一〇九三) も、詠まれている地は多賀城・八幡の沙丘、末の松山に外ならないとし、歌学書『袖中抄』や歌僧宗久による紀行文『都のつと』、歌集『橋為仲朝臣集』をも援用して論証、比定しています(注8)。

加えて『末松山』は貞観の洪溢の前にも、後にも、真に波濤のこしたのでは無い。越しさうで、こさない所で、此沙丘が詠興せらるるのである」と述べ、歌枕「末の松山」には貞観津波の反映があることを明言、その含意を解明した点で、国文学の研究史の上からも画期的論考です(注9)。

発光現象と震源に言及

さらに『三代実録』の「流光如晝隠映(流光昼のごとく隠映す)」という記述にも注目、当時まだ奇怪視されていた地震の際に起こる発光現象について、火山による発光を仮定して検討を加え、結果、記録されるべき火山灰降下や噴煙等の異変が一向に記録されておらず、これは火山爆発によるものではなく、「流光の光源は、海上に映じた者で無かったか」と先見的に論じています(注10)。

また、津波を引き起こした地震の震源についても推察し、明治二十九年の三陸津波の例も引いて「去ぬる二十九年の、三陸大海嘯は、陸上の火山暴発を待たずして、他に遠海に震動の原因を持つて居た。貞観の地震津波も、恐らくは、苅田嶺(蔵王嶽)の暴

発に因るにあらざして、他に遠海に其の震源を持って居た者であらうか」とする推論は的確です。

史料の錯字を指摘

現在でも諸本によって表記に異なることから、時折議論を呼んでいる『三代実録』文中の「去海数千百里」部分（「千百里」とするものと「十百里」とするものがあり、「千」字と「十」字の異同をどう見るか）に關しても吉田は論及しており、「去海は、府城と海汀の間隔にほかならず」千百里は「誇大と申さねばならぬ」とし、「国司の奏言に数十百里と有つたものを、十が千にいつとなく誤られたものであろうか。兎角字句に疑惑がある」と誤伝・錯字である可能性を指摘しています（注11）。

浸水域を推定・開発による痕跡消失も考慮

吉田が想定した貞観津波の到達域については、「海口と申すは、今の湊浜（原文フリガナ「ミナトハマ」）で、八幡（原文フリガナ「ヤハタ」）川（注12）の水脈を逆行して、多賀城の下まで、津浪が押し込みました者であらう」「沿海所々、皆洪溢の襲ふ所となりましたであらう、即、湊浜の南北、少なくとも、遠島（原文フリガナ「トホシマ」）（牡鹿半島）から阿福麻（原文フリガナ「アフクマ」）にかけて位は、海湾の大形勢の上より打算して、其洪溢区域であるであらう」としています。

田野が津波によって水没してしまった事例は、夫木和歌抄の

「朽ちのこる野田の入江のひとつばし心細くも身ぞふりにける」（平政村）の野田の入江、弘安百首の「稀にだにとふの浦風音づれば野田の松がねかたしきやせむ」（長明）と歌われている十符の浦が傍証として解りやすいとし、仙台藩編さんの地誌『封内風土記』や佐久間洞巖の『奥羽觀蹟聞老志』も引いて貞観以後の地名の変転を考察しています。

「八幡川（市川）の南を流る冠（原文フリガナ「カムリ」）川（七北田（原文フリガナ「ナキタダ」）川）の、浴々として低野を横流し去るを見ても、此にも津浪の打込まれましたことを想像される」が、田子（多湖）の浦はその「桑滄（そうそう）の変」すなわち桑田滄海（そうでんそうかい）桑畑がたちまちにして青々とした海に變じる意）を語る地名であると書いています。

また、津波を遡及させた海口の湊浜は、やがて多賀の湊と称されるようになったけれども、今は全く港の形状をしていない、これはその後仙台藩が行った運河の開削（貞山堀）（注13）によって海口が埋もれてしまったためである、とも記し開発の進展による地形変動にまで言及しています。

探索を将来に期待

吉田は最後に、今後の研究の進展に期待を寄せ、貞観津波の襲来地であったであろうと判断される遠島から逢隈の間の汀辺河口所どころにその痕跡があり、まだまだいろいろ話が出てくること予想されるので今後探索すべきである、と結んでいます。

辞書の補遺にとどまらない論考

はじめにも述べたとおり、吉田はこの論文を『大日本地名辞書』の記述の遺漏を補う目的でまとめたとしています。なるほど本文の二字下げ小活字の文章は、細部で異なるところはありますが、地名辞書陸前宮城郡の【末松山】【市川】【野田】【田子】【湊浜】各項中の文章の一部とそれぞれほぼ一致しています。

全十一分冊で発行された地名辞書の第五冊之上の発行日は明治三十九年六月八日。本論文を掲載した雑誌『歴史地理』の発行は同年の十二月一日です。その後、地名辞書は著者生前から没後までいく度か版を重ね(注14)、戦後には増補版の刊行もありましたが、本論文の趣意を加味した改訂が加えられたといった形跡はありません。

吉田は冒頭、辞書への記載忘れを悔い「余りの手ばかりで独で苦笑するより外に、方がありません」と自嘲しています。しかし今にしてみれば、皮肉にもこのことが逆に奏功して、碩学による「貞観地震」「貞観津波」にテーマを絞った先駆的論考が独立して残される結果となりました。

著者のかつてのフィールド

実は吉田にとって、論文の対象地である陸奥府城すなわち多賀城の辺を含む宮城の地は、かつて彼がフィールドとした特別の地でした。一八八五年(明治十八年)、二十一歳の吉田は一年志願

兵として仙台鎮台(歩兵第四連隊)に入営し、この地で軍隊生活を送ります。在営中、日曜日には宮城師範学校内にあった宮城書籍館(しよじやくかん)に通い詰め『奥羽観蹟聞老志』等の文献を読み漁り、あるいは仙台付近の史跡を訪ね廻る等余念がありませんでした(注15)。実際の仙台滞在期間は一年に満たないものでしたが、まさにこの地は歴史地理学者吉田東伍にして学問の基層を育んだ揺籃の地でもあったのです。

即ち本論文は、著者の十分な土地鑑をもって認められたものである、という点をここで確認しておきたいと思います。

おわりに

以上のように今回の震災域で過去にも大規模な地震・津波が起きていた事は、既に一九〇六年(明治三十九年)の段階で歴史地理学者吉田東伍によって『日本三代実録』の記述を検証する形で解析・公表され、しかも将来のフィールド・ワークまで提起されていました。

したがって貞観地震とその津波による災害は史学史上においては一世紀以上も前から既知の事件であったと言わねばならず、こうした点からも、今回の地震による大津波の襲来を一概に前知不能な「想定外」の事象であったかのごとく形容し、片付けてしまふ訳にはいきません。

今後、災害史研究の精度を向上させる上でも、関連諸分野の先行研究に対する謙虚な姿勢でのレビューがぜひ必要です。

注1 「マグニチュード9・0の衝撃」『日経サイエンス 特集 東日本大震災 通巻四八〇号』（日経サイエンス社 二〇一一年六月）ほか

注2 国史大系本による（改訂増補国史大系 第四卷『日本三代実録』黒板勝美校訂）

注3 一九九〇年代の端緒的研究として、阿部壽・菅野喜貞・千益章「仙台平野における貞観11年（869年）三陸津波の痕跡高の推定」『地震 第2輯 第43巻第4号』（日本地震学会 一九九〇年十二月）が注目される。同論文では、本稿で取り上げた吉田の論文の再録（『日本歴史地理之研究』一九二二年／一九七五年復刻版）を引用して、吉田による『三代実録』「城下」の多賀城比定と「千百里」を錯字とする指摘についても簡単に触れている。

注4 ① 箕浦幸治「特集 津波災害は繰り返す」『まなびの杜 2001 夏 No.16』（東北大学 二〇〇一年六月） ② 宍倉正展・澤井祐紀・行谷佑一・岡村行信「平安の人々が見た巨大津波を再現する―西暦869年貞観津波―」『AFERC NEWS No.16』産業技術総合研究所 活断層・地震研究センター 二〇一〇年九月） ③ 『日経サイエンス 四八〇号』（前掲注1）ほか

注5 日本経済新聞 二〇一一年三月二十七日付 社会面記事（見出し「津波警鐘間に合わず 対策促した研究者ら落胆 あと数年あれば…」）など

注6 貞観地震・貞観津波について地震学の観点から注意を向けた最初の研究者は東京帝国大学地震学教室の今村明恒（一八七〇―一九四八）であるときされている。原拠として、今村による①「三陸沿岸に於ける過去の津浪に就て」『地震研究所彙報別冊 第1号』（東京帝国大学地震研究所 一九三四年三月）、②「日本に於ける過去の地震活動に就いて（未定稿）」『地震 第1輯 第8巻第3号』（地震学会 一九三六年三月）、③「日本に於ける過去の地震活動に就いて（増訂）」『地震 第1輯 第8巻第12号』（地震学会 一九三六年十二月）の各論文が示される場合が多いが、貞観の地震・津波に関しては各論文とも構成の一部として触れられているに過ぎない。対して注目すべきは、学問分野の基点は異なるものの、貞観地震・津波を主題とした吉田の論文がこれらを約三十年も遡って発表されているという点である。吉田論文の歴史的評価・位置付けは、分野、分類を越えた横断的視点に立ってなされてしかるべきであろう。

注7 多賀城下とする見解が今日通説となっているが異説がないわけではない。仙台平野南部の武隈（岩沼市）に一時国府があったとする伝説（歌枕「武隈の松」にまつわる故事を振りどころにした説）の存在から唱えられている武隈館説である。ただし、これまで同地で累積されている考古学・歴史学的知見からは謬説と言わざるをえない。

注8 末の松山の比定候補地は今日でも、多賀城市八幡のほかに、(1)現・福島県いわき市説、(2)現・岩手県二戸市説、(3)現・宮城県石巻市須江（旧・桃生郡河南町）説がある（「末の松山」『宮城県の地名』日本歴史地名体系第4巻 平凡社 一九八七年による）が、一般的には多賀城市八幡説がもっとも有力とされる。ちなみに、作家白洲正子（一九一〇―一九九八）は著書『私の百人一首』（新潮選書 一九七六年）の中で吉田の『大日本地名辞書』を引いて「吉田東伍氏は八幡の方を正しいとし、そこには「末松神社」という古い社もある。「歌枕」は、名前と景色が美しいだけでなく、その地方の歴史と結びついて、はじめて成立するのである」と書いている。

注9 末の松山と貞観津波の関係を論じた近年の論考では、①清水大吉郎「末の松山浪越さじ」とは？」『地質ニュース553号』（地質ニュース編集委員会 二〇〇〇年九月） ②河野幸夫「歌枕「末の松山」と海底考古学」『百人一首のなぞ』國文學 第52巻16号十二月臨時増刊号 學燈社 二〇〇七年十二月）（のち『百人一首のなぞ』として改版 二〇〇八年十二月）が知られる。②では本歌の「君をおきてあだし心をわがもたば末の松山波も越えなむ（東歌一〇九三）」も掲げつつ「太平洋から大津波が押し寄せ、「末の松山」を飲み込んで内陸へ逆流したのではなかったか。そのときの恐ろしい情景が、この歌の中に（記憶）されて残ったのではないか。」として「末の松山」を波は越えたという立場に立つ。さらに「旧仙台藩の教ある歌枕遺跡は、すべからく藩主や文人たちが一七世紀に定めたものであって、『古今集』の昔から存在していたわけではない。」「（略）だからと言って宝国寺の裏山が本当に平安期の歌枕の「末の松山」であり、この細長く続く小山を大津波が襲ったとは言えない。なぜなら、海岸に松山がせり出す風景はどこにでも見られるからだ。そこを「松山の末」とか「末の松山」とよんだことは容易に想像できる。だが、場所を特定することはかなりむずかしい。最初は地名だったとしても、和歌に慣習的に詠まれるようになれば「歌ことばで」であり、特定の場所を

表現するものではなくなる。(愛の約束を破る)を表現するための記号なのである。だから「末の松山」は和歌の世界に存在するというべきであって、現実の世界に存在する地名ではない、といったほうがあつていい。】と言う。

このように②については吉田の見解、すなわち「末の末松」を波が越すということとは貞観地震の前にも後にもなく、越しそいで越さない所だからこそ、多くの歌に「末の松山」が歌い込まれ「歌枕」になった場所そのもの(地名||固有名詞)である―波が越えるということとはあつてはならない事態で不変の象徴として「末の松山」は存在する―とする解釈とは大きく異なる内容である。『古今集』で初めて登場する歌枕としての「末の松山」は、多くの和歌に影響を与えた。たしかに波越えしてしまうかのような歌も後には詠まれるようになるが、本歌当初の概念はあくまでも「末の松山」の波越えはあり得ない。』ものとして詠まれている、と理解するのが至当であろう。歌枕「末の松山」にある含意、すなわちその歌全体の歌意に関わる話に繋がるので、疎かにできない論点であり、後考を待ちたい。

注10 わが国で古記録に残る地震の際の発光現象が研究者から注目されるようになるのは、一九三〇年の北伊豆地震(M7・3)で発光の目撃例が多数あつたことを契機に、東京帝大地震研究所囑託の武者金吉(一八九一―一九六二)が『地震に伴ふ発光現象の研究及び資料』(岩波書店一九三二年)を出版して以降のことである。今日、地震発光現象の存在は広く知られるようになったが、発光のメカニズム等に諸説があり、「その後も地震による発光現象の研究はまったく進んでいない」(上田誠也「科学研究のあり方、忘れられた一つの局面」『科学 Vol.77 No.9』岩波書店 二〇〇七年九月)とされる。

注11 「十」字を採用する国史大系本『三代実録』は寛文刊本(松下美林寛文十三年(一六七三)校刊本)を底本としているが、標註に「〇数十、原作数千、據類史改」と記し『類聚国史』の巻百七十一(災異(地異)部五)の記述との校合に拠って「千」字を「十」字に改めたことが解る。国史大系本が行き渡る以前は、「千」とする寛文刊本が流布本として出まわり、以来、該書由来の翻刻が継続されてきた。例えば明治十六年(一八八三年)六月出版の佚存書坊版(明治十八年七月四日文部省交付)や国史大系本が刊行されて後の明治四十年(一九〇七年)三月発行の郁文舎版(桜井庄吉翻刻発行)なども

「千」としている。なお、京都大学附属図書館所蔵 平松文庫の『三代実録』(寛文十三年刊本)は「千」字を「十」字に朱字訂正してあり、国立公文書館所蔵の慶長十九年(一六一四年)写本は「十」と記している。今日では国史大系本に倣い「千」を謬とし「十」を正と見る向きが大勢のようである。

注12 現在の砂押川を指す(以前は「市川」とも呼ばれた)。

注13 塩竈市・多賀城市・仙台市・名取市・岩沼市にまたがる運河。近世初期から明治中期にかけて数次にわたって建設された。「貞山堀」の名は伊達正宗のおくり名、貞山公にちなむもので、明治十六、十七年頃、大改修工事の際に付けられたという。

注14 「吉田東伍『大日本地名辞書』の版歴について」(ウェブサイト「世紀をまたぐ『大日本地名辞書』」<http://wind.ap.teacup.com/chimei/>)

注15 ①高橋義彦「文学博士吉田東伍君行実」『吉田東伍博士追懐録』(高橋源一郎編 私家版 一九一九年九月) ②千田稔『地名の巨人 吉田東伍―大日本地名辞書の誕生―』角川叢書26(角川書店 二〇〇三年十一月)に詳しい。

※なお、紹介した論文は吉田没後、実弟高橋義彦校訂・編になる吉田の著作選集『日本歴史地理之研究』(富山房 一九三三年(大正十二年)十二月発行・一九七五年(昭和五十年)八月復刻)にも再録されている。

(*わたなべ ふみお 阿賀野市立吉田東伍記念博物館 館長)



すえ まつやま
吉田東伍が本論文でとりあげている【末の松山】 (2011年4月撮影)

契りきなかたみに袖をしぼりつつ 末の松山なみこさじとは (清原元輔)

吉田東伍は本論文の中で、現・宮城県多賀城市八幡の宝国寺裏にある小高い丘が、「末の松山」であるとし、『末松山』は貞観の洪溢の前にも、後にも、真に波濤のこしたのでは無い。越しさうで、こさない所で、この沙丘が詠興せらるるのである」と述べ、歌枕「末の松山」には貞観津波の反映があることを明言、その含意を解明している。

どんなに大きな波でも末の松山を越すことはない…波がこさない＝二人の仲は心変わりなく永遠であるというたとえになった。逆に、波が越える＝心変わり、破局を意味する。

3.11 東日本大震災でもやはり『末の松山』そのものが波を被ることはなかった。ただし丘下の周縁、町並は浸水してしまった。



多賀城跡から見た仙台平野

吉田東伍は本論文の中で貞観地震の際、湊浜の海口から八幡川（現在の砂押川）を逆流して、「多賀城の下まで、津浪が押し込みました者であらう」と書いている。

吉田東伍の 20 世紀初頭のこの指摘が、3.11 発災に至るまで、地震・津波研究に生かされることはなかった。



阿賀野市立吉田東伍記念博物館 研究概報 1

2011年5月11日 発行

発行・編集 阿賀野市立吉田東伍記念博物館

〒959-2221 新潟県阿賀野市保田1725番地1 電話 0250 (68) 1200 FAX 0250 (68) 5016
URL http://www.city.agano.niigata.jp/togo_museum E-mail y.togo@oregano.ocn.ne.jp